安全の誓い 夜空に刻む

福知山花火 4000発大輪

福知山市の花火大会「福知山HANABI2025」が11日、同市由良川の河川敷で開かれ、11年ぶりに再開した昨年の倍となる4000発が夜空を彩った。3人が死亡した2013年の事故現場近くでは法要も営まれ、大会実行委員会のメンバーらが再発防止を誓った。（石井斉）

大会は、13年8月15日夜に3人が死亡、54人が重軽傷を負った屋台爆発事故後に中止されたが、昨年8月、屋台を河川敷から離れた御霊公園に移すなどの安全対策を講じた上で、11年ぶりに開催された。

今年は朝からの雨で観客の出足が遅かったこともあり、予定より15分遅れでスタート。河川敷の有料観覧席で、観客が事故の犠牲者に黙とうした後、20分余りで4000発が打ち上げられ、市民らが歓声を上げた。妻や孫らと訪れた宇治市の会社員藤田正一さん(66)は「福知山の花火は初めて。目の前を遮るものがなく、迫力があった」と満足そうだった。

御霊公園や広小路通りでは、昨年より約20店多い35店の露店が営業し、多くの人でにぎわった。会場周辺では昨年より増員された警備員らが巡回し、安全に気を配った。

奥田友昭・実行委員長(44)は終了後、実行委のメンバーらを前に「今年も事故なく終わったが、これを続けることで、今後（の開催）が醸成される」と語った。

◇

打ち上げに先立ち、事故現場近くの堤防に設置された「伝承碑」前で法要が営まれ、近くの久昌寺の森俊彦住職(47)が読経する中、実行委のメンバーら40人が花と線香を手向けた。森住職は「事故当時はお盆の法要を終え、寺にいた。犠牲者の冥福（めいふく）、被害者の癒やし、大会の安全を祈ってお経を唱えた」と話した。

花火大会検証会議（会長＝浦中千佳央・京都産業大教授）のメンバーは堤防や御霊公園で、混雑具合や警備状況、露店の配置、有料観覧席への誘導状況などをチェックした。年内をめどに検証結果報告書をまとめる。

事故現場近く 犠牲者悼む法要

伝承碑前で営まれた法要で手を合わせる実行委のメンバーら

福知山城上空を彩る花火。4000発が打ち上げられた（40秒間露光）（11日午後8時33分、いずれも福知山市で）＝川崎公太撮影